



～年頭のごあいさつ～

明けましておめでとうございます。謹んで新年のご挨拶を申し上げます。また、日ごろより農業センターの運営に対しまして、ご理解ならびにご協力を賜り、心より感謝し、厚く御礼を申し上げます。

昨年を振り返りますと、長期にわたる水不足の影響で、パッションフルーツ・ミニトマトという島内2大特産物の生育・収量が非常に心配されましたが、例年と変わらない高品質な果実が出荷されており、農業者の皆様の高い技術力と日頃のきめ細やかな栽培管理が感じられました。

一方で、昨年は、小笠原に多くの台風が襲来し、特に10月に発生した台風21号は、瞬間最大風速52.7mと、非常に強い勢力で、父島・母島両島の農産物・農業関連施設に甚大な被害をもたらしました。本来なら、年明けからパッションフルーツやミニトマト等の特産品が島内外に出回り、島民や観光客の皆様楽しんでもらえるはずでしたが、今年は、農業者にとって、非常に厳しい船出となっています。ダメージは大きく、復旧には時間がかかると思いますが、一日も早く本来の体制に戻ることができるように、支援を継続していきたいと考えています。

さて、農業センターでは、今年度も様々な試験研究課題に取り組んでまいりました。

その成果については、成果報告会やセンタ

ーニュース等を活用して随時お知らせしますが、特に、アフリカマイマイ防除については、個体を誘引・捕獲するためのトラップを独自に作成しました。実証試験を実施したところ、アフリカマイマイを多く捕獲できることを確認しました。まだ改良を重ねる必要がありますが、新たな防除法として展開していきたいと考えています。

また、今年から病害虫実験棟の解体・改築工事が始まります。母島の営農研修所管理棟の建替工事も進んでいます。新たな機能を有する施設とともに、農産物の生産性向上や新規品目創出の試験研究、経営の安定化・省力化をめざした技術開発等に取り組み、より一層、農業者の皆様の期待に応えることができるよう努めてまいります。

今夏は、いよいよ東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。世界中が東京を注目する中、東京で唯一の世界自然遺産登録地である小笠原をPRする絶好の機会でもあります。農業センターでは、関係機関と連携して、各種媒体を通じて小笠原農業に関する魅力の発信等、積極的に取り組んでいきたいと考えていますので、今後とも皆様方のご協力とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

＜産業課長：石島＞

～ 新資材を利用したパッションフルーツ栽培 ～ 赤色 LED と UV カットフィルム

農業センターではパッションフルーツ（以下、パッション）電照栽培で利用できる新たな光源として赤色 LED の利用を検討してきました。そこで赤色 LED の利用方法をご紹介しますとともに、アザミウマ類の防除資材「近紫外線カットフィルム（以下、UVC）」の試験結果についてもご報告します。

（１）赤色 LED の利用方法

①赤色 LED：ピーク波長が 660nm（色合い：赤色）のものを利用してください。一方で、白色 LED はパッションの開花を誘導しない可能性がありますので、使用は控えてください。

②設置回数・方法：設置回数は 1 個/10m² です。設置位置は栽培棚から 80cm 上とします。設置回数が少ないと開花盛期に遅れがみられますので、設置回数を守ってください。

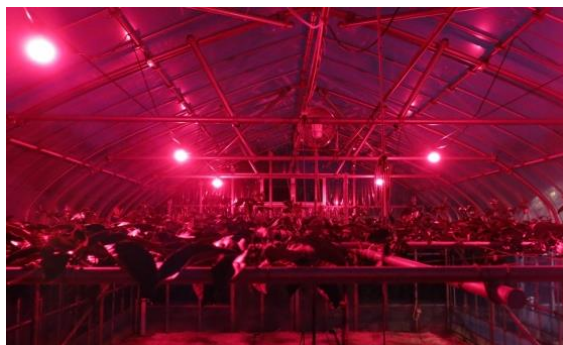


図 1 赤色 LED の設置の様子

③電照時間：白熱電球と同様に行ってください。農業センターでは、1月 10 日から 16:30～20:00 で電照を行ったところ、2月 27 日から開花が開始しました（2016 年試験、11 月 10 日定植）。一方、2017 年試験において、日中電照（6:00～20:00）することでアザミウマ類の防除効果を検討しましたが、防除効果はみられず、逆に結果

枝の伸長抑制や開花の遅延が発生しました。赤色 LED の照射時間は必ず夕方～夜間のみとしてください。LED の利用にあたっては、ピーク波長や照射時間、設置個数を十分にご留意ください。

（２）UVC の有用性について

2017 年試験において UVC をハウスに展開することで、アザミウマ類による花の寄生率並びに被害果率を低下させることができました。また、UVC による果皮色への影響もみられませんでした。トマト栽培でも利用できる UVC はパッション栽培においても有用であることが分かりました。



図 2 花に寄生するクダアザミウマ

（３）お知らせ

パッション施設栽培における暑熱対策（遮光ネット）について、リーフレットを作成しました。農業センターや営農研修所、農協などで配布していますので、ぜひ参考にしてみてください。

＜パッションフルーツ担当：中村＞

令和元年度成果報告会のお知らせ

下記のとおり試験成果報告会を開催致します。

○母島 【母島出張所 2 階会議室】

1月 28 日（火） 16：30～18：00

○父島 【農協直売所 2 階】

2月 4 日（火） 15：30～17：00

詳細は村民だより等で別途お知らせ致します。

～小笠原オレンジの優良系統選抜について～

小笠原諸島特有のカンキツ品種「小笠原オレンジ」は島内消費だけでなく、冬期の観光資源としても期待できる農産物です。

農業センターでは、村内から収集した4つの有望系統個体について、収量および果実品質特性を調査し、優良系統を選抜しました。

農業センター露地圃場に植栽した「小笠原オレンジ」4系統（硫黄島由来I系、父島由来SおよびK系、母島由来O系）および対照品種「フロストバレンシア」をそれぞれ4樹（2007年定植、2015年結実開始）供試し、継続的に収量および果実品質特性を調査しました。また、2018年には、かいよう病発生程度および食味評価も行いました。

●各系統の収量性

1樹あたりの4カ年累計収量は、I系が最も多く、I系およびO系は対照品種よりも高収量でした（表1）。S系とO系は年次変動が小さく隔年結果性が弱いといえます。

表1 「小笠原オレンジ」の1樹あたり収量

品種・系統	収量 (kg/樹)				
	2015	2016	2017	2018	累計
小笠原オレンジ I系	2.4	24.9	2.2	16.5	46.0
S系	3.2	7.8	10.2	12.2	33.4
O系	2.2	11.6	14.0	10.5	38.2
K系	1.9	12.7	1.8	10.7	27.0
フロストバレンシア	8.1	15.1	2.4	9.8	35.4

●各系統の果実品質

一果重は2カ年ともI系が優れていました（表2）。S系とK系は2カ年ともクエン酸含量0.9%未満であり、糖酸比が高く推移し、食味がぼやける可能性が示唆されました。

表2 「小笠原オレンジ」の果実品質

品種・系統	1果平均重 (g)		糖度 (Brix%)		クエン酸含量 (%)		糖酸比	
	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018
	小笠原オレンジ I系	312.0	291.1	11.2	10.5	0.92	0.97	12.2
S系	266.5	236.1	11.5	10.6	0.79	0.84	14.6	12.7
O系	269.6	235.7	10.5	12.0	0.88	1.29	11.9	9.4
K系	268.1	236.7	12.2	11.4	0.87	0.82	14.0	14.0
フロストバレンシア	286.4	200.0	10.9	11.7	1.72	1.79	6.3	6.5

●食味調査の結果

食味の総合評価では、好みが分かれ、どの系統も僅差でしたがI系が最も高い評価となり、次いでS系、O系、K系の順となりました（表3）。

表3 「小笠原オレンジ」の食味評価

系統	5段階評価の平均値			
	甘味	酸味	香り	総合評価
I系	3.44	2.12	2.72	3.44
S系	3.51	2.14	2.84	3.42
O系	3.16	2.91	2.77	3.40
K系	3.30	2.35	2.91	3.30

品種名は伏せて調査：20～60代の43名

事前に食味したフロストバレンシアを3とし、未：未記入、甘味：1（弱）～5（強）、酸味：1（弱）～5（強）、香り：1（弱）～5（強）、総合評価：1（悪）～5（良）として評価

a) 平均の算出式： $=[(評価1の人数 \times 1) + (評価2の人数 \times 2) + (評価3の人数 \times 3) + (評価4の人数 \times 4) + (評価5の人数 \times 5)] / 総人数$

●総合評価

表4 「小笠原オレンジ」各系統の評価

項目	I系	S系	O系	K系
収量	◎	○	○	×
隔年結果性	×	○	○	△
1果平均重	◎	○	○	○
貯蔵性	◎	○	×	△
かいよう病発生程度	△	△	×	×
食味評価	○	○	○	△
総合評価	◎	○	△	×

以上より、総合的に多くの項目において優れており、また欠点が少ない硫黄島由来I系を優良系統として選抜しました。

今後、I系に関する基本的な栽培管理技術について検討を進め、小笠原の新たな特産品として導入し生産できるよう技術提供を進めていきます。

＜カンキツ担当：田邊＞

～小笠原ネコプロジェクトについて～



農地の周りや道路沿いでカゴわなが設置されているのを見たことがあるでしょうか。ここでは、支庁産業課を含む関係機関で協力して行っている「小笠原ネコプロジェクト」についてご紹介します。

○小笠原ネコプロジェクトとは？

小笠原には、アカガシラカラスバトをはじめとした固有の鳥類やカツオドリ、オナガミズナギドリなど小笠原で繁殖する多くの海鳥がいます。しかし、2005年頃、野生化したネコ（ノネコ）による捕食のため、これらの鳥類が絶滅や繁殖地の消滅の危機にあることがわかりました。

これをきっかけに、ノネコを捕獲するプロジェクトが始まりました。このプロジェクトでは、環境省、林野庁、東京都、小笠原村、NPO法人小笠原自然文化研究所、東京都獣医師会などが協力し、ノネコの捕獲、一時的な飼養、東京への搬送、動物病院での馴化、飼い主への譲渡を行っています。

○ネコの捕獲

捕獲作業はカゴわなで行っており、捕獲個体の保護の観点から、必ず仕掛けた翌朝に点検を行い、捕獲が確認されればネコ待合所に搬送します。農業センターの敷地内でもカゴわなを設置しています。



図1 ネコ捕獲用のカゴわな

○ネコの一時的飼養

東京へ搬送されるまでの間、ねこ待合所（通称ねこまち）で専任の担当者が給餌や体調管理等を行います。体調が悪くなったネコの治療等は、世界遺産センター動物対処室が対応しています。

○東京への搬送、そして飼い主への譲渡

東京での受け入れ先の動物病院が決まると、関係機関の職員の付き添いのもと、おがさわら丸で東京へ搬送されます。



図2 おがさわら丸のペットルームでの様子

東京に到着したネコは動物病院へ運ばれ、避妊去勢手術や人に馴らす訓練が行われます。訓練が終わったネコから飼い主へ引き取られ、新しい生活が始まります。

これらの取り組みの結果、これまでに約830頭のネコが搬送されました。ここ数年は毎年カツオドリの営巣が確認されるようになり、アカガシラカラスバトも400羽程度まで生息数が回復するなど、危機的だった鳥類の繁殖状況は改善されてきました。今後も継続的な取り組みが必要ですので、ぜひ皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

<産業担当：大橋>